

## 対談および質疑応答

○諸富 今日私の期待を超えて、かなり踏み込んだ話をしていただいたと思います。特に最後の結論部分で、与えるもの競争が始まるみたいな、経済学で通常考えられていたことの逆の競争という話。それからお金という単一な尺度ではなくて、多様な尺度を設けていくことの重要性を強調して頂きました。それから、通常経済学では自由貿易が望ましいとよく言われているように、経済圏を統一して、拡大して、なるべく自由に取引をやって、お互いに経済的利益を最大化していくことがいいんだと教えてきたはずなんですけど、今日の安田先生のご提案は、各経済圏をつくった上で、そのトークンの交換をむしろ不自由にして、それぞれの地域が、独自の経済圏をつくっていくというものでした。究極は、経済力が世界貨幣に換算して評価をされて、今日ずっと前半からお話されてきたように、所得というものに還元されていく、それで豊かさを測るといふことへの疑問に関連していくかなと思うんですね。

先生の今日のお話を伺っていると、所得や財産が大きい人が幸せで、それだけで価値が測られるという世界は何かおかしいんじゃないかという問題意識があって、能力のある人、ない人、あるいはその他と言われますけど、それは全部所得を稼げる人かどうかだけで割り切られてしまうのはおかしい話ではないかと。いろんな才能とか能力を別の次元で評価

をするとか、貨幣を使わない世界で交換されているものの評価をどうするかというような問題提起もありました。

要するに、多様性というキーワードは何回も出てきましたけれども、その評価をしていくと、結局、経済学が考えてきたような単一の次元で全てが測られてしまう世界から離脱することを考えざるを得ないというのが今日のお話で、なかなか経済学者からはどっちかというあまり出ない話をすごくしていただいたので、すごく面白かったと思います。これは私の感想ですね。

この具体的な設計は、時間の制約もあって、展開して頂くお時間がなかったかもしれないですけども、最初の質問として、せっかくですので最後のスライドででてきた宇沢先生の「社会的共通資本 2.0」について、お伺いします。ここのメンバーはみんな宇沢先生のことを知っていますし、読んでいる人も非常に多いし、私も宇沢先生と一緒したことがあります。ここに「社会的共通資本」が出された点に関心があるんですね。これはどういうことなのでしょうね。安田先生のコンセプトとどこか共通になっている部分があるのでしょうか。

○安田 まず宇沢先生の名前をあえて書かせていただいたのは、僕自身、宇沢さんがやってきたことはものすごい昔から関心があったんですよ。著作もプロ向けのハードカバー論

文はあまり読んでいないんですけども、一般向けに書かれたものはだいたい目を通していて、

皆さんもご案内のとおり、晩年というか、日本に帰ってきて以降、かなり長い期間「社会的共通資本」というものをきちんと定義をして、推薦していくことに宇沢先生は時間と労力を割かれていたと。

ところが宇沢先生の本は、コンパクトなものでいうと岩波新書の『社会的共通資本』と、そのものずばりのものが出ていますが、読んでいてもちょっと個人的につかみどころがないというか、あまり何を言いたいのかというのは伝わらなかったんですね。

それはどうしてかという、経済学でいうと、例えば公共財がありますよね、公共財と宇沢先生がおっしゃっている「社会的共通資本」、何となく公共財よりも広いものを捉えようとしていることは分かったんですが、ではどう違うのかとか、どういうふうに標準的な経済論のフレームワークで、この「社会的共通資本」を理解すればいいのかということが個人的には謎だったんです。

この数年、資本主義について自分が今日お話ししたような視点から分析するようになって、おそらく標準的な経済学のフレームワークに乗らない何かを宇沢先生はずっと考えていたのではないかと、そこは自分の意思でも少し標準的な経済学のフレームワークから、ある意味解脱することによって、何となく分かってきた気がしています。

経済学の通常の分析スタイルだと、私的所有であるとか、利潤動機であるとか、市場経済というのは、ほぼ与件として与えられてい

ると、ここを相対化して考えると、単に公共財という側面ではない「社会的共通資本」、あるいは社会的な基盤としての私的、市場経済外の要素というのが見えてくるのではないかと、ここで、キーワードとして「社会的共通資本2.0」を挙げました。

2.0の意味合いとしては、宇沢先生が著作の中で書かれていたことプラスアルファのものが、新しい技術とか、若い人たちの新しいアイデアによって実現はしつつあるので、そういったものをうまく取り込むと、おそらくこれは希望的観測ですけども、宇沢さんが実現したかったようなものを、少しバージョンアップしたかたちで実現できるのではなからうか、そのきっかけの発想といますか、見え方みたいなのが最近になってやっと、ちょっとつかみ切れてきました。

さすがに宇沢さんに並べるほどではないですけど、何となく、大昔は狭い経済学領域の中にしかいなかったときは、まったく分からなかったんですが、何となく最近少し見えてきたということです。まだまだ全貌を理解するには修行が必要なので。

○諸富 よく分かりました。そういうことでのいまの安田先生の話を受けると、確かに宇沢さんのやろうとしたことというのは、たぶんアメリカにいるときは彼がシカゴ大学にいらして、いまで言う経済成長論の仕事をされていて、でもたぶん経済学主流の中にながらでも、振り返るとシカゴの仕事のときに、すでに宇沢さんはいまで言う内生的成長論、ローマーが昨年ノーベル賞を受賞しましたけど、人に対してちゃんと投資をしていくこと、あるいは人が能力を高めることで実は経済成長につながっていくという論点をモデ

ル化したわけですね。それまでは資本と労働の2つの生産要素で説明していたんですけども、当時の経済成長理論で考える範疇を超え、「人（人的資本）」が大事だよということを経済学の数学モデルの中に入れ込もうとして、そのアイデアが彼が当時育てた弟子が後々活躍して行って受け継がれ、その一端にノーベル賞があったんです。

その萌芽が、すでに宇沢さんが経済学の主流の中にいたときからあって、帰ってこられてからさらに日本のたぶん現実を見られて、特に彼は戦後すぐの東京を知ってまして、帰ってきたら東京の町はすっかり変わっていて、子どもが外で遊べない、自動車が走り回っていて空気がものすごく汚れていた。この状態を見て、いったいどうしたんだろうかと。経済は成長したけど、むしろ私たちの生活水準は下がってしまったのではないかという意味で、日本社会における経済成長と生活の質の落差には彼に衝撃を与えたいんですよ。

彼の書いている文章では、アメリカにいるときは日本の経済成長の様子を数字だけで見ているので、ものすごく誇らしかったと。だけど帰ってきたら所得は上がっているけど、むしろ人々の生活は道路の端っこにやられて、緑もないと。

ということから、これを経済学の問題として引き受けようというところから始まったということを見ると、今日の安田先生の話とすごく重なり合うところがあると思って伺っていました。

特に社会的共通資本が、社会資本、制度資本、自然資本の3つからなるということで、特に制度資本とか、これはやっぱり多様性の

方面だと思うんですね。制度資本には教育とか、医療とかいっぱい含めているんですよ。安田さんの社会的共通資本概念の中には教育とか医療とか全部入ってくるので。

そういう意味では、今日の安田先生のお話の中でも、触れようとされた「資本」という考え方について、より詳しい展開をお願いします。

○安田 そこでの宇沢先生が使われていた資本という用語の使い方で見ると、まさにこのキャピタルそのものなんですよ。もちろん狭い意味での営利企業の生産に限らない、何かしらのかたちで実体経済に関わるようなものを生み出す活動、あるいはその基盤のことは資本、キャピタルというかたちで呼ばれていて。

同じように、資本って富の意味でも使われることはありますけれども、そういった実体経済に関わらないものは、ここでいうとWealthなんです。たぶん宇沢先生の頭の中にそっちは資本と呼ぶべきではないというのがあったのではないかと思います。

そういった意味でも、あらためてこの種の資本主義分析みたいなことをこの数年始めてから、宇沢先生が考えていたことは少し理解できるようになったかなという実感はありますね。

あと先ほど諸富さんがおっしゃっていたトークンのお話のところ、1個だけ。よくメインストリームの経済学でいうと、単一の物差し、お金、需要と供給のxを見ると縦軸が共通のもので、世界全体の同じ市場で取引されるときは、市場の失敗とかなければ、当然パイは最大化される、効率的な資源配分を実現できますという話があります。今日の話と

の関連で1個誤解されがちなのが、要は細かく地域ごとに経済が分かれていて、しかも地域間での為替というのはあまり円滑に交換ができない、本当に経済圏が分断されているという状況を考えているのではないか、という点ですね。市場や経済圏が分断されているのか、それとも統合されているか、という前提で解釈されてしまうことが多いんです。

そうではなくて、今日の話というのは、いろんな経済圏があるんですけども、個人が複数の経済圏に同時に参加できるところがポイントなわけです。昔、まだグローバル化が起こる前というのは、主に生まれた場所とか暮らしている場所という地理的特性に従って、1個しか経済圏に所属できなかったんですね。そうではないと思いますけどね。なので、個人が複数の経済圏、場合によっては経済だけではなくて、社会的な属性として、京都大学の学生であるとともにどこかでバイトもしている、実はNPOをやっているとか、最近だったらオンラインサロンで東京の意識高い系の人たちと一緒に交流するとかいうかたちで、個人が幾つもの領域に参加できる。

これを、まさに京都大学の卒業生ですけど、平野啓一郎さんが「分人」と表現されていましたが、これは分人型のイメージですね。それがいま風なところで、かつては経済圏が分断されていて、個人はどこか1つを選ばなければいけなかった。いまは、分断しているんだけど同時にたくさん選べる。それが積み重なっていくことによって、1個しかない経済圏なら法律ではさすがに実現はできないんですけども、他方で、個人で見たときに、全ての経済圏でもってこぼれ落ちてしまうみたいな人は減ってくるのではないかと。もっと

言うと、これは単に経済の所得とか物質的な富だけではなくて、生きがいみたいなものをどこで感じるかとか。

今日はエレファントカーブを通じて没落する先進国の中間層の話をしました。衝撃的なのは近年、アメリカですけれども、平均寿命が短くなっているんですよ。なぜか。一応、平均を見ると経済成長はしているんです。没落した中間層とはいえ、物質的な意味で文字通り減っていつている人というのは少数なんですけれども、それにも関わらず平均寿命が短くなっています。多くはアルコールや、ドラッグ依存になってしまう。

ここから先は推測ですけども、生きがいを感じにくくなっている人たちは、先ほどの経済的に苦しい中間層を中心に増えている。結局、1つの物差しでしか測れないような、特にアングロサクソン系の社会というのは強烈にお金の物差しが働く世界なので、そこで生きがいを見いだせない、仕事に就けない、あるいは何らかのかたちで金銭的な物差しに乗っかってこない人たちというのは、仮に物質的に再分配等を通じて救われても、おそらく生きていくことはほとんどつらくなっていたのではないのでしょうか。

そういった意味でも多様化、多次元化していつて分人化していくと、複数の物差しに自分が触れていくことができると、広い意味での豊かな社会になっていくのではないかなという気はするんです。

○諸富 なかなか刺激的なお話ですね。いままでのストレートな思考法だとそういう忘れられた人々とかいう、アメリカの中西部のアパラチア山脈のところとか、中西部というのはかなり広い領域ですけど、かつては五大湖

周辺の製造業が盛んだった地域ですけど、そこで製造業が傾いてきたときに、所得を失っていた人たちがドラッグにいまは冒されて、男性の平均寿命が下がってきているといいます。

その人たちに対してとにかく政府が再分配する、助けるということがすぐにストレートに出てきがちなんですけど、今日の安田先生のお話はむしろ、彼らがお金とは違った軸で評価をされる、例えばコミュニティーへの貢献とかいうところで、かつて盛んだった鉄鋼業で働いて稼ぐというのとはまた違う貢献が行われることによって、それが社会的にも評価されて自分の生きがいに戻ってきて、ドラッグに走っていた人がそこから脱却して行って、社会に積極的に関わろうと思えるようなきっかけや仕組みづくりができるんじゃないかということだと思うんですね。

ただ、それでも問題は食べていけるんだろうかと、それはどうなんでしょう。

○安田 今日お話ししたことは、かなり理想論のところはあるんです。いま言った、複数の経済圏とか多様化が進んでいったとして、それでもこぼれ落ちる人がいると思うんです。政府の再分配が必要にならないということは訪れないと思うんです。

その際に必要になってくる金額が大きく変わるんじゃないか、現状の単一の市場経済を中心に、お金の物差しだけで回っている状況で、そこでこぼれ落ちてしまった人を救うために膨大な予算がかかると思うんですが、複数の経済圏があることで、直接政府が関与しないといけない再分配は減るかもしれないということです。

イメージとしては、昔、地域共同体が生き

ていたころというのは、そこまで中央政府が積極的に地方交付金を付けたりとか、再分配をやらなくても何とかかなっている人が多かったと思うんですけど、それがどうもなくなってきたいて、何らかのかたちでそこを埋めていかないと、おそらく中央政府が今後やれるかという、もたないのではないのでしょうか。とりわけアメリカにしても日本にしても、累積債務の問題があるのでそこまで大胆な再分配や、社会保障を今後継続することは難しいかもしれないという視点に立つと、いままでとちょっと違ったアプローチとしてこういった複数の経済圏の分人化、多様化みたいなものを進めるムーブメントがあってもいいんじゃないかなという話ですね。

似たような話として、共感資本主義であるとかトークンエコノミーとかおっしゃっている方がいるんですが、僕も根は保守的な経済学者なので、バラ色の未来を持ち過ぎてもまずいとは感じています。この種の話というのは、実は僕の専攻分野の1つでもある産業組織論で議論されている価格差別と非常に近い問題かもしれません。

どういうことが近いかということ、例えばいまでもシニア割とか学割とかありますよね。消費者の属性によって価格を変える。あれができるのは基本的にサービス業だけなんです。物の売買に適さない。なぜかというとなんと転売できてしまうからです。複数の経済圏があってそこで物を売ると、Aという経済圏の方がBという経済圏より安く買えるとなった瞬間に、裁定取引が起きてしまうかもしれません。なので、その辺のことに気を付けないと、絵に描いた餅に終わる危険性が高いんですね。一方で、サービスの場合には、売買

と同じタイミングで消費が行われるため、転売ができない。今日、ちょっとご紹介したタイムコインみたいな誰かの時間を買う、借りるみたいな話というのは基本サービスなので、そういったところは従来の円とかドルのお金の世界で決まっている価値尺度とは違ったものの取引・交換が可能かもしれないですね。

なので、シェアリングエコノミーってものすごく加速しているんですけども、「モノ」から「コト」へ、皆さんもよく聞く、この動きが進めば進むほど複数の経済圏とかトークンエコノミーというのはやりやすくなるんです。裁定取引にさらされにくくなるというのも、一応隠れメッセージとしてあります。

○諸富 このお話も面白いですね。ですから経済構造が変わってきて、いわゆる「モノ」づくりから、「コト」づくりというかサービス化が進んできて、ちょっと私もそれは「非物質化」と呼んでいるんですけど、ハードな手で触れることができるモノ(“tangibles”)を売り買いする、テレビとか、「モノ」をつくって売って所得を稼ぐという世界から、サービスや知的財産とか、あるいはブランドとか、本来ものづくりとは違った非物質的なところで経済が回り出して、そちらの方が、価値が大きいという世界へと移行しつつあります。トヨタなんか車も車を売ってなんぼのビジネスではだんだん先細りに将来なるから、車を使ったサービスでどうやってビジネスができるか、頭を切り替え出しています。

そういう世界に入っていくと「モノ」というのは標準化しやすくて、ちょっとコストダウンしたところは勝つという割と単線的な競争の世界ですけど、サービスの世界に入ると

質が問われるようになってきているので、サービスの多い、少ないだけではなくて、どんなサービスか、そのサービスの質ということが注目されるようになってくると多様化の世界が入りやすくなっていくのではないかといい仮説ですけどね。ただ、サービスを評価する尺度は、何らかのかたちで入ってくるのではないかと思います。それを用いてサービスとサービスの比較をやるのではないかと。

例えば環境経済学でも、環境評価論という世界があって、今日の話で、多様化とその評価をどうするかという世界に直結するんですけども、環境は見えないので、みんな空気を汚しても罰を受けないわけですよ。だからつい汚してしまう。だけど、どれだけ環境に価値があるかというのを見えるようにした上で、それを汚した人が経済的に損を被るような仕組みづくりをしようと環境経済学は考えるわけです。それで環境を尊重する経済社会に移行しようということが言われてきていたんです。

でもやっぱり環境の評価の仕方についても、本来自然は多様なので、多様な自然評価をするべきなんですけど、結局比較をする場合に貨幣価値を導入して、金銭的に幾らという貨幣価値評価に、つまり単一評価にどうしても経済学が行ってしまうんですよ。

その多様な尺度を設けるということの難しさと、それから結局、貨幣価値が便利なのは、単一に評価ができてしまって相互比較がやっぱりできてしまうということですよ。これをあえて断ち切るということが本当にできるだろうかというのが、少し安田先生の話聞いて思いました。

○安田 結論から言うと断ち切ることは難し

いでしょうし、それは必要ないと思うんですね。重要なのは、あまりにも広い物差しであるお金とはちょっと違うものの存在感が、いまより出てくるかどうかなんです。

例えばわれわれは、経済学の分析でも究極的にはお金よりは消費活動や、人々の意思決定、行動に関心があって、行動を何が誘発しているかというのを見ると、お金も依然として強い動機となっていますけど、それこそSNSでどれくらい「いいね」を獲得できるかとか、コメントが付くとかいったことが情報発信の動機になっている人というのすでにたくさんいます。「いいね」みたいなものはある種のお金以上に場合によっては強力な物差しになっているといえます。

ところがその上で、あえて先ほど問題提起させていただいたのは、結局「いいね」も受け取る数なんです。お金とは違うけど、何かもらいました。たくさんもらっている人はある種、偉いみたいな。その辺は、実はまだSNSも出てきてから10年ぐらいのものなので、これから先、新しいタイプの、ひょっとしたらコミュニティーが出てくるかもしれませんが。例えば「いいね」にしても、一人から「いいね」をもらおうと、それを1個の「いいね」としてカウントしているんですけども、「いいね」をたくさん蓄積できた人はカウントの仕方が変わってくるみたいなことも、当然考えられるわけですよね。ある種の累進課税みたいなものですけどね。

そういったものも、このコミュニティーの中で設計者がデザインすれば、やりたいことはいくらでもできると。ある意味ネットワークで個人の参加者の属性が全部把握できているので、お金の持っている匿名性を乗り越え

たデザインが可能になるんですね。こういう条件を満たしたユーザーは、その世界におけるトークンのようなものが蓄積しにくくなるとか、あるいはこういう条件を満たしたユーザーは新たな出会いを通じてトークンを蓄積しやすくなる。そこもデザイン次第なんです。可能性が開かれている。

いろんなかたちのそういったトークンエコノミーというのは、これから先出てきてもおかしくないと思いますし。究極的には円やドルの法定通貨の世界でなぜこれだけ格差の問題になり、これだけ累進課税が重要なところで、ピケティはじめ、いろんな人がいてもなかなか実現できないかということ、なぜ稼いだものをとられなければいけないんだという、根本はそこにあると思うんですよ。

デフォルトは私的所有があると、そこから国家権力で富を吸い上げられるというようなモードになってしまっているんですが、こういったトークエコノミーの場合、最初から設計段階として、例えば富が減耗していく、毎年蓄積していった「いいね」の数が1割ずつなくなっていくみたいな、そもそも仕組みの中に入れておいて、それは分かった上で参加すれば、後からおまへの「いいね」を召し上げるみたいなことをやる必要はないんですよ。というところも、いろんな広い意味で設計に自由度があると。

○諸富 昔ありましたよね。ゲゼルという、つまり有効に使わない、ためているだけのお金というのは社会的に意味がないし、さっきの冒頭の話に出てきた1%の人が、世界の半分を握っているというのもためておくだけというわけですね。使えない、消費できないというなら、社会的には無駄な資源がある、積

まれているだけなので、そういうのはどんどん減価しますよという社会ルールにしておくと、これを有利に使う人のところに資源が自動的に流れていくような社会的仕組みはないだろうかというようなことが1つ。

それから、政府が介入して、右から左へ移転するというのはいままでずっと経済学で考えてきたし、累進課税もそうなんですけど、社会の仕組みとして、社会に無意味なかたちで富をつなげている人から有意義に使える人に資源が流れていく、そういうことはこれまでも行われてきました。それに対して、安田先生のご提案は、政府がトップダウンで何か、この人は有意義でこの人は無意味と決めるのではなくて、ピアレビューでお互いの評価を付け合ってやっていくという結果ですかね。

○安田 その際に、ここから先は超富裕層の動機を解明しないことには何とも言えないんですけど、仮に相対的な富の蓄積を彼らは競っている、自分のある意味有能であることのシグナルとして、富裕者でありたいというのが彼らの動機の中心部分を占めるのであれば、同じ率で課税をするということは相対的にランキングは変えないんですよね。みんな同じように適切に払うんだったら10兆円を持っている人は半分の5兆円になりますが、8兆円を持っている人も半分の4兆円になりますと。

そこで相対的なランクが変わらないのであれば、おそらく彼らの、とられるのは嫌かもしれないんですけど、消費活動はほぼ変わらないはずなので、自分たちの富裕層としての序列も変わらないのであれば、そこである意味再分配に回せるお金というのは、かなり有

効な Capital として活用できる可能性があるかと。

あとはゲゼルのスタンプマネーみたいな話がありましたけれども、現状は金融資産に投下していることの魅力は腐らないということなんです。実物経済にキャピタルなかたちで入れた瞬間に資本減耗は始まりますし、かなり高いリターンが期待できないと、おいそれと投資できないと。

一方で、金融資産というのは何も富を生み出さなかったとしても、銀行に預けておいても極端な話、腐らないので減ることはないんですよね。皮肉なことに土地であったりとか、株であったりとか、多くの金融資産が実体経済よりもはるかに高い成長率で増えています。しかも腐らないということになってくると、相対的にもものすごいそっちが魅力的に見えてしまう。だからこそ、ある種の減耗していく、お金が腐っていくみたいなのは、こういう時代だからこそある程度意味があるのかなという気はしますよね。

○諸富 古いアイデアとしてゲゼルというのは、皆さん知っている方もいらっしゃるかもしれませんが、非常にバージョンアップしたかたちで、どうこれを活かすかということをお話しいただいたかと思います。

そろそろお時間です。安田先生がご講演の中でちょっとお話し足りなかったかなというようなことを、個人的な興味も含めて聞かせていただきました。ここからせっかくの機会ですので、皆さん質疑応答の時間に入りたいと思います。

では質問、コメントがあったらどうぞ。

## 質疑応答

○フロア1 お話をありがとうございました。2点お伺いしたいんですが、1点目は非常に抽象的になってしまうんですが、特に先進国において国家債務の累積が問題になっていますが、資本主義の持続可能性を考えたときに、1つのテーマとしてそういう課題があるのかなと思うんです。そういった将来世代から借りているということと、安田先生がお話しされた資本主義の再起動であるとかアップデートということが関係してくるのかというのが1点目です。

あともう1点目が、最後のトークンエコノミーの話で、トークンが何かしら地理的に経済圏として、もしくは制度的に限定して、既存の貨幣とは違う何か価値を表すというときに、グローバル化の進展のそもそもの大前提として、何か世界的に1つ共通の価値が共有されていたことがあるのではないかと認識していて、それはかつて金であったかもしれないし、戦後は金やドルであったと思うんですが、そういったトークンの価値を基礎づけるものは何になるのかなと。従来の金とかドルではない、トークンの価値を基礎づける何かについてお伺いしたいというのがもう1点です。

○安田 1人ずつ答えていった方がいいですね。忘れてしまうといけないので。

まず1点目の財政の面から見た維持可能性に関して、主にそういうことを分析しているのはマクロ経済学者で、僕自身はミクロの人間なので明示的には触れなかったんですけど、どんどん政府が直接支出に回せる財政的な余裕というのはなくなっていくと、

できるだけ負担のないかたちで、どうやってこの種の資本主義の危機を乗り切るかというお話を簡単に今日はさせていただきました。最後は諸富先生と対談の中でも触れましたけれども、こういった地域共同体コミュニティみたいなものを、理想的にはトークンのようなものを活用しながら太くしていく、広げていくことによって直接的な再分配、社会保障といった国の支出を減らせる余地があります。そこを育めば育むほど、財政の意味での維持可能性は高まります。

個人的に、最終的にこういうのが載ってしまうとどうかと思うんですけど、素人ながらちょっと考えているのは、日本もアメリカも膨大な累積債務にある意味苦しめられていて、当然、いろんな意味での同盟国で、共通の経済だけでなく、政治面を含めても距離感の近い2国なので、極端な話、日米の間でお互いの国債を持ち合うということはかなり大規模にできる可能性があるんですね。

差し当たって500兆円分とかを、どんとアメリカの財務省が日本の国債を持ち、現時点で計って同じ規模のアメリカ国債を日本の財務省が持って、お互いに塩漬けにしまえば、実質的に記帳からは消えるわけです。もちろんそんなことをやっても意味がないではないかと、多くの主流派の経済学者は思うでしょう。僕もそんな気がするんですけど、それをやるだけで一応、市場に出回っている国債を表面上は消すことができます。

お互いの財務省は何か、例えば日本からするとアメリカ経済がゆがんでも、わが国としては現在所有している米国債を売却しない、あるいは何らかのかたちでそういったことにコミットでき、お互いにコミットすると、実

質的に過去に発行した国債の相当分の割合は、有事なつたときに問題を引き起こさなくなるのではないのでしょうか。

さらに言うと、一番のリスクは自国の通貨が大暴落するとか、自国経済にとんでもないカストロフィックなことが起きてしまうことなわけですが、日本でそういったものが起きたときに大量の米国債を持っていて、日米共にこけたら終わりですが、アメリカが残っている場合には、日本政府が保有している米国債を基に再建の第一歩を踏み出すことができる、それはアメリカも然りですよ。

こういったことは単に経済の話を超えて、国際政治にもつながるので、よほどの同盟国同士でないとなりにくいとは思いますが、比較的経済規模や、長年にわたる信頼関係があればできるかもしれません。

なので、巷で最近だと MMT とか過激な理論が横行していますけど、そんなのをやるぐらいだったら日米両国で互いの国債を持ち合つて、しばらく塩漬けにする方がいいんじゃないかと個人的には思っています。それは専門外の話なので、与太話だと思つて受け取つてください。

グローバリゼーションが進んでいった背景に、何か単一の価値観や、価値を支える根源的なものがあつたのではないかという点。確におっしゃるように、20世紀の途中まではずっと経済的な取引、お金の背景に金であつたり銀であつたり、あるいは何らかのかたちで金と紐付いた米国のドルであつたりとかがありました。

ところが、いまはもうすでにどの国においても、法定通貨というのは何ら直接的な裏付けがないです。1万円札を日本銀行に持つて

いつても金と変えてくれるわけでもなければ、日本国政府が1万円札と認めている、まあ紙切れですけど、終わりなんですよ。ということを踏まえると、現状のトークンと法定通貨に大きい違いはないです。

なので最近、仮想通貨が出てきて、ビットコインとかが盛り上がったときに、何かお金でないものが価値を持って気持ち悪いだとか、怖いという声はあるんですけども、真に気持ちの悪い瞬間はおそらくドル金本位制が外れたときですね。何も裏付けを持たない法定通貨、フィアットマネーが流通したその瞬間に人類は何てやばいことが起きているんだと気付くべきだったんです。

そこで実は大した混乱もなく、金の裏付けというのを取っ払うことができてしまったので、そこから先に起きていることというのはあまり大きい違いはないというのは僕の考えです。

なので、何らかのかたちで人々がトークンであれ、お金であれ、将来使えるという予想、期待ですよ。これが醸成されれば、ある意味何でもお金になります。まさに僕自身が研究しているゲーム理論の考え方なんです。ある種の紙切れであれ、電子情報であれ、それが金属であれ、何かしら明日も使える、明後日も使える、1年後も使えるという信用を人々の間に醸成すると、そういった期待感が、われわれの言葉でいうとナッシュ均衡として成立しているような状況であれば、何でもお金になります。

そういう意味では特に異常なことは起きていません。たまたま20世紀に至るまで金とか分かりやすい貴金属系のものがお金の裏付けになっていただけで、それはあまり法律で

はなかったのではないかということ、この数十年の間に人類が学んだというのが僕の考えです。

○諸富 次の方。

○フロア2 すごく面白い話だったのでいっぱい聞きたいことがあるんですけど、1つだけ。物差しの多様化というのが1つキーワードで挙がっていて、そのときに、単に学力でいうと偏差値だけではなくて、スポーツとか多様な才能を評価されるべきではないかという話があって、それは大変そのとおりだと思うんですけど、私が格差の拡大という話とも絡めて思うのは、結局その多様な才能を獲得できるかどうかすら、一番最初の所得に大きく依存してしまうのではないかということです。文化資本をその子がどれくらい持っているかということも、どれくらい習い事をさせられるかとか、文化的なことに触れようとするような家庭で育つかどうかということに依存してしまうのではないかということです。

要は、世代から世代をまたぐ階層の固定化みたいなことにつながって、現にそれは起きているのではないかということについて、何かコメントをお願いしたいなということです。これがいまのところ関係して、複数の経済圏に同時に所属するとか、複数のコミュニティとか、社会圏に同時に所属することでこぼれ落ちる人を救うというアイデアも、結局そこで所属するコミュニティというところにも階層が発生していて、だいたい同じような所得と文化的背景を持った人間がそういうコミュニティに所属して行って、社会に対する恨みつらみをどんどん募らせて行って、排他的な思想を持って行ってみたいな人

たちはどんどんそういうところに発生していく。結局、大きな意味ではますます分断というのは進んでいくのではないだろうかという懸念を思ったんですけど、それに対して何かコメントがあればお願いします。

○安田 いずれも鋭い論点です。まず文化資本の話に関して言うと、現在の文化資本の格差というか、分断みたいなものを全体に考えたときに、結局使える物差しの数の中で増えれば増えるほど格差は軽減されるのではないかというのが僕の考えです。

なので、文化資本の格差をなくす、世代を超えた格差の固定化というのはできるだけ軽減したいんですけども、完全になくすことはできません。完全になくすことができない中で、物差しが1種類しかないというのは弊害がもろに出てしまうんですね。

少しでもその弊害を減らすために、せめてパフォーマンスの部分をいろんなかたちで見える化するのがいけないか。先ほど挙げた例は、アートとかスポーツとか分かりやすいことしか挙げなかったのも、もろに文化資本の影響を受けそうなんですけど、例えばクラスの中で友達の話をしゅくり聞けるとか、遅刻せずに学校に来られるとか、あるいは低学年だったらすぐに泣きやむことができるとか、いろんなかたちで、たぶん見ている周りの大人たちからすると、その子の個性は分かると思うんですよ。それをどうやって記録して、見える化して、褒めてあげるかということですよ。

これは社会人になってからも人間関係とかで会社に勤めていると、たぶん見た目先の売り上げとか営業成績とかというのはおそらく見える化されるし、賃金や昇進にもつながる

ので話題になりやすいですけれども、さっき言った職場内の仮想通貨などを通じてたくさん助けてあげた人というのは、トークンが増えるとか、そういったかたちで従来こぼれ落ちていた社員のパフォーマンスが見える化されれば、お給料に直結しなくてもやりがいにつながるかもしれません。

そういったかたちでの見える化を進めていくと、現状のそういったいろんな意味での持っているものの格差の中で生きがいや、物質的な豊かさのアンバランスというのは少しでも解消できるのではないかというのがアイデアになります。

もちろんいろんな意味でのスタート段階での条件の違いというのは緩和していくべきだと思いますし、そういった施策もぜひ進めていかなければいけないと思うんですけれども、そういった入り口としての格差の解消と同時並行でできることとして、出口のパフォーマンスの多様化、見える化というのも進んで開けると、よりいっそう不平等が解消できるのではないかと個人的には考えています。ありがとうございます。

○フロア3 実は私、京都市の職員でございます。2つのコミュニティーに同時に参加をさせていただいているものです。

常に、個人的になんですが、いかに京都が脱炭素を目指していけるかということを考えているんですが、脱炭素経済を移行するにあたって必ず弱者が生まれてきます。そこで公平な移行をいかにやっていけるのか。脱炭素経済になることで、職を失う人たちが出てくるというところなんですけれども、そういった方をいかに救っていけるのかというのが、次は自治体としてしっかりと考えてから政策

を打ち出さないといけないなと思っていると

今日は安田先生のお話を伺って、そういった方々はまた違う物差しの中の経済圏ができたなら、そこで救っていけるのではないかといいところで、少しアイデアをいただいたような気がしております。

そこで質問なんですけど、少し不躰になったら本当に申し訳ございません。豊かな人は2つ同時に入れるんですね。3つも同時に入れるんですね。それは貨幣経済というものを持ったまま、2つ、3つ入れることができる。それによって多様性が生まれるというのも本当にごもっともだと思っただけなんですけれども、社会的弱者の方が貨幣経済から、言い方は悪いですがこぼれてしまった。その中で、では新しい物差しがここにあるから、この経済圏であなたは活動してくださいと言われてときに、私たちはどう納得させられる説明ができるのかなというところが1つ。

あとは経済圏ごとのヒエラルキーのようなものが、新たに生まれるのではないかなという危惧を少し思ったのですが、その辺り、何かお考えがあったら教えていただけないでしょうか。

○安田 今日の複数の経済圏の話は、まだお金を通じた市場経済圏があまりにも巨大なので、ないもので、今後出てくるものの話をしているんで、いま言ったようなイメージをたぶん持たれるんだと思います。

ただすごい長い目で見ると、そういった市場経済と違うものが生まれたときから、そこかしこにあると。それこそどのSNSを使うのかと同じようなかたちで、どの地域の地域共同体に属するかみたいなのが選択肢として

与えられていると、おそらく市場経済でこぼれ落ちた後に探すのではなく、ある程度空気のように分人化ができるようなかたちになっていくのではないか。

ひょっとすると、そのきっかけになるのは小学校教育とかかかもしれません。来年度からでしたっけ、プログラミング教育が始まりますけれども、一応公教育を受ける全ての子どもたちが、新しいネット空間上では、そういったコミュニティに所属する最初のパスポートみたいなものを受け取るようになるわけですよ。

そうは言っても、家庭にパソコンもなければスマートフォンもない、結局なかなかそういったものにアクセスできない子が出てくるとは思うんですけど、これも比較論になってしまうんですが、諸外国と比べると各家庭に1台でもスマートフォンがあるみたいな、日本は多いんですよ。

全ての人を救うのは難しくても、いままで1つの経済圏しかないことが理由で不遇な状況に置かれた人たちが、可能性としては多様な社会で広がっていく方向にいくと期待していますし、それにつながるようなかたちで経済圏を増やしていかないと、元の木阿弥になってしまうと思います。

冒頭の脱炭素化を進めていく上で、こぼれ落ちてしまう人、ある意味、排除を生み出してしまふ点について、それは脱炭素に限らず、何かしら社会が大きく動いて産業構造が変わっていくときに、こぼれ落ちてしまう人が出てくるかもしれません。

従来言われるのは、ミスマッチが雇用に発生するので、次の仕事が見つかるように職業支援とか教育をしましょうというものです。

そこは引き続きやれば良いと思うんですけど、もう1個の考え方として、何かしらの産業構造の転換のきっかけを起こすような、いまの例で言うと、脱炭素技術を導入して、いままで使っていたある種の在サービスを打ち切るといようなアクションを起こすような主体に対して、契約を打ち切った後にそこで働いていた人たちの雇用であったりとか、所得保障であったりとか、何らかのかたちで面倒を見ていけるような産業構造の転換を図る主体に対して、プラスの評価がもたらせるような指標がつけられると少しインセンティブが変わるかもしれないです。

単に儲かるから新しいのにする、新しい投資をする、使っているサービスを切り替えますというのではなくて、儲かることは儲かるんだけれども、そこで上がった収益をある意味キャピタルとして、こぼれ落ちてしまった人たちの再活用に役立てるような投資が、真の意味でのソーシャルかつエンパイロンメンタルな投資なんですよ。それも、ひょっとすると物差しをうまくつくってあげることによって、よいアクションみたいなのを起こせるかもしれないですね。

当事者の方はそういうのは得意なはずなんですよ。いったん産業構造が変わった後にミスマッチが起きてしまった人の再教育とか全部、国とか自治体が面倒を見ますといったとしたら、そんなにノウハウがあるわけではないので分からない。

なので、近くの、ご本人を前で言うのもあれですけど、おそらく同業者、餅は餅屋なので、近くにいる人たちが待てと、われわれは儲かるから契約先を変えただけで、そこで失われた雇用なんて知ったこっちゃないという

のが普通の人情かもしれないです。そこで少し面倒を見てあげると劇的に資本市場であったりとか、税の優遇であったりとか、何らかのメリットを受けられるようなかたちにしてあげるとかというのは、発想としてはあるかもしれないですね。具体的なアイデアはないですけど、そこをもう少し、見える化で改善できるような気はします。

○フロア4 僕がしたかった質問は、今ちょっと解決された部分もあるんですけど、あらためて物差しの多様化の1つの方向性についての質問です。

僕も自分でトークンを考えてみたことがあります。6コインというのを考えたんですが、これは6回しか使えないんです。Twitterとかの語源とかで、友達と友達を6回繰り返すと全員につながるというので、6回より1回少なくして5にしようとか考えていたんです。

もう1個はGPSデータを付けて、ある区間内の価値の取引というものに付加価値を付けるとか、またその6コインの6という数字、使える回数を増やす、減らすというのをやろうかなと妄想していたんです。

そもそものこのアイデアの源泉は、地域間に壁をつくりたいというところで、地域に壁がないから東京に人が出てしまったときの外遊性というものを、普通の市民が変えることができないのではないだろうかというようなところがあって、自分の観点は都市ということにとどまっているんですけども、先日、先生も解説されていましたモレッティ教授の本を読みまして、そこで都市経済学のさわりを勉強したんですけども、そういうところを含めて、都市を守ることで、その都市にあ

る非貿易部門が都市の雇用の80%ぐらいを占めているわけですから、ヨガのインストラクターとか生産性が上がらないような雇用というものを守っていくことも大事だろうと。

いま自分が取り組んでいるのは、公共サービスというものを、その地域が運用している価値というものを、公共価値や、また地域に雇用を、その危機感を持っているということの公共価値とか。宇沢先生の制度資本の拡張みたいなものにも当たるんですが、そういったものをいま研究しているんですが、この公共価値に対しての物差しというものを、どういうふうに考えることができるかなという質問なんです。先ほどの質問に答えられたみたいに、いろいろと政府の方からこういう価値があるんじゃないかと提案はできると思うけども、実際の社会は、例えば一地方政府がこういった価値があると試算しましたので、市民の皆さんお願いしますみたいなのは、なかなか厳しいんじゃないかなというところもそうですし、またこの研究が、いまドイツの方で先端研究が行われているんですけど、それも定性的なアンケートによる市民のニーズをくみ上げるというかたちなんですけど、定性的なアンケートだと市民権を得られるのかなとか、そういったふうを考えていまして、物差しの多様化について、公共価値ってどういう可能性があるかなという質問です。

○安田 物差し自体はもちろん縛りがないので、ありとあらゆるものが使えれば物差しになると思うんです。

1個、いまいただいた質問の中で面白いなと思ったのは、基本的にはお金で測る、円で測るのだけれども、そこで、地元で使われたお金なのか、そうではなくて東京だったりと

か、関西だったり、使ったお金、そこの違いが見える化するというのは、結構簡単にできるかもしれません。それこそ、いま政府が積極的にキャッシュレスを勧めています。どこで買ったかというデータは蓄積することができます。

例えば同じ本を買うのに、東京の八重洲ブックセンターで買っても、僕は地元が大阪ですけど、大阪に戻ってきて買っても、別に値段は変わりません。地元で買った方がある意味地域貢献というような観点からすると、貢献度は高いかもしれないですけど。

その辺は何となく個人として、同じようなものだったら地元で買おうかなとか思っている人はいるんですけど、具体的に自分が1冊、地元の本屋さんで買ったときに、どれぐらい貢献できているのかは、おそらく見える化されていないですよ。

そこが何となく、月々、自分が地元経済圏で幾ら使っているか、そうじゃないところで使っているか、行動パターンをこう変えると、どれぐらいコミュニティーに貢献できるかみたいなものを数値化できる。ベースに使っている元のデータとしては円というか、消費データでいいんですけど、それを少し加工することによって、コミュニティーへの貢献度みたいなものは出せると思うんですよ。

場合によっては、ここから先は自治体ができるかどうかですけども、貢献度の高い住民の人を表彰してみるとか、いろいろなイベントを考えられますよね。8割以上を地元で消費してくれている人は、商店街でちょっとポイントが増えるとかというようなことは、たぶんキャッシュレスにすればかなり簡単にやれます。

そういったことをやる自治体というのは、おそらく活用していくと思うんですよ。あとはアイデアとやる気のある自治体がどれだけそれを推進できるかです。

ポイントは、技術はもうほとんど整っていますし、地域通貨をなぜで挙げたかというところ、やっぱり仮想通貨、簡単にトークンを実装できることによって、ちょっとしたアイデアと実行力のある人がいれば、極めて低予算で非常に扱いやすい地域通貨というのがつくれるようになってきていると。

先ほど、ドイツで先端的な研究をプロジェクトであるというお話にありましたけど、僕自身もこういうやり方があるのかと驚いたのは、ドイツで使われているキームガウアーという地域通貨で、ユーロとは一応1対1で紐づいているんですけども、仕組みとしては特定のドイツの、どこの町か忘れてしまいましたが、地域で使える地域通貨キームガウアーにユーロから換えるんですよ。1ユーロ=1キームガウアーというかたちで、1対1で交換できると、面白いのはキームガウアーに換えた瞬間に、確か換えた金額の5%ぐらいをどこかに寄付できるんですね。自分の指定した団体、おそらく地域に関連した団体に寄付することができる。なので100ユーロ換えると5ユーロ分寄付できますと、使える100キームガウアー分というのは、基本的に1ユーロ=1キームガウアーなのでその地域では使えると。

そういった5ユーロ分の寄付とか回してどうやって運営しているかというところ、一定期間キームガウアーという地域通貨を使わないと、さっきのゲゼル通貨と同じで目減りするようになっています。確か半年使わないと3%

目減りするとかいったかたちで、使わない人に対して課金をしていると。

もう1個が、キームガウアーは使い勝手が悪いのでユーロに戻したいとなったときに、ユーロに戻すために5%分の手数料を取るといことですね。100ユーロを100キームガウアーに換えてまったく使わずに100ユーロに戻そうとすると、95ユーロにしかならないとかたちで、最初の5ユーロの寄付を捻出しているというイメージですね。

一応、為替としては1対1で交換はできるんですけど、交換したら手数料というところを通じて交換を不便にしているんですね。なので、できるだけ地域通貨のまま活用をされる。キームガウアーを使える地域のお店というのは目安になるとか、あとは一定期間使わないとキームガウアーが目減りしてしまうの

で、富の蓄積に対しても一定程度の効果があるみたいなかたちで進められている地域通貨プロジェクトなんです。

僕自身もそういったものに触れるまで、地域通貨ってスタンプに毛の生えたものかなとか思っていたんですけど、やりようによってはかなり洗練されたものにデザインできると。ここから先は、国を超えて地域間で、非常にざっくり言うと、いけてるこの地域通貨をどうやってつくっているかという競争になっても面白いなという気はしますね。

○諸富 はい、お時間が過ぎましたので、これにて安田先生の講演会を終わりにさせていただきます。安田先生の大変魅力的なご講演のおかげで、活発な討論ができたかと思えます。安田先生とこの企画に御参加頂いた皆様に感謝申し上げます。